61　シーボルトと眼科医伊東昇迪

酒井シヅ

伊東昇迪（一八〇四―一八八八）が米沢藩医で、シーボルトの弟子であったことは呉秀三の『シーボルト先生その生涯および功績』（東洋文庫）に詳しい。しかし、近年、伊東昇迪の手記が新たに公表されたことで、伊東昇迪が眼科医であったことが判明した（金子三郎編著『伊東昇迪』リーブ企画株式会社、一九九二年刊）。また石井禎一氏がこの史料をもとにシーボルトの長崎での様子を紹介したが（『シーボルト』）、ここでは史料のひとつ『西遊雑記』を中心に、伊東祐迪こと直庵が土生玄碩の弟子になる経過、長崎遊学に至った理由、長崎での日々、とくにシーボルトの鳴滝塾、出島でシーボルトから親しく学んだ生活を報告する。

『西遊雑記』によると、伊東昇迪は土生玄碩から眼科を学んでいる。土生はシーボルトから散瞳薬を教えてもらい、その礼に葵の羽織を送ったことでシーボルト事件と大きく関わったことはすでによく知られているが、土生はシーボルトから眼科を学び、さらに多くを学びたいと、伊東をシーボルトの処に送ることにした。土生は文政九年、江戸の宿舎（長崎屋）でシーボルトに玄碩を引き合わした。長崎ではシーボルトが伊東昇迪を特別扱いをしている。伊東は長崎の出島に出入りを自由に許され、鳴滝塾でもシーボルトから親しく学んだ。伊東昇迪の子孫の家に眼科道具一揃いと眼科薬が伝わったが、それがシーボルトから貰ったときの様子が『西遊雑記』に次のように記されている。

「（文政十年十一月二九日）」足下の眼科術に篤志なる固より土生公の門下の人なれば左もあるべきなれども余亦深く感ずる所あり　且つ足下余に親炙して余亦大いに足下の徳を得るもの多し　因て足下に一物の贈与すべきものあり　眼科内障機器余只一具を齎した　年既に明れは余亦西に帰る　此後は手術をも施す間隙もなければ敢て多く惜むに足らず　聊か以て足下若し此器を以て既に盲

するを開き高名を天下に轟かさば余が志亦足りぬ　去年余江都に行く　土生公父子及び眼科諸医皆余に此器を請ふ　若し之を与えは余が利亦多し　然れども余若し此器を欠かば更に何を以て余が術を行はんや　譬へば手臂を失うか如し　故に遂に与えず　今帰期已迫る　且つ足下の篤志に感ず　因て以て相与ふ　謹みて治を誤ることなかれ　只此内の一針余帰路咬留巴王の託を受けて施すべき病人あり　暫く以て借与せよ後応に咬留巴より伝え送るべしとてシーボルト筐中秘蔵の器機一具一筐を贈り且つ治験せし眼疾図解一巻を手づから模画し　其文をも写して贈りたり　余も其恩の厚を感じ再拝して受く　嗚呼余が拙劣何の幸いにして日本未曽有の器機を得たるに実に余が幸いにして此器機の不幸なり（中略）今年春に至れは余が帰朝亦迫る　（文政十年）正月二三日シーボルト先生に別れを告ぐ　先生亦離情稍切なり　為に数種の薬品送別の文字　余眼科を以て広く世に行うべきの許し文を与えられたり（中略）　江都に到り土生公父子に相逢ふ真に父兄に接するが如し　両公の喜び知るべし　西遊中治療のことを談じ又大いに両公の眷顧を得たり（中略）江都公邸寓居の間その中に就いて抜粋し　三部の書となす　然れども帰朝甚迫る　僅かに此の一巻を草得たり…温故楼主人識」

以上からこれまで眼科史にはまったく登場しなかった伊東昇迪がシーボルトから眼科を学んだ眼科医であったこと、子孫に伝わった眼科道具と薬がシーボルトから貰ったものであることが確認されたのである。

（順天堂大学医学部医史学研究室）